

フランスの建築家・都市計画家レオン・ジョスリー

三田村 哲哉
社会環境部門

Léon Jaussely, architecte urbaniste français

Tetsuya MITAMURA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract:

Léon Jaussely won the design competitions for a people's square and for a public square at the École des Beaux-Arts in Paris. He was interested in "Une Cité industrielle" designed by Tony Garnier in 1904 at the Académie de France à Roma. He studied the new methodology of town planning based on not art but science, which we called "urbanisme," while he won competitions of town planning for cities both within and outside of France, such as Barcelona (1904), Berlin (1910), Paris (1919) and Ankara (1922). After World War I, Jaussely designed master plans under the Law Cornudet, which had been prepared at the Section d'hygiène urbaine et rurale of the Musée Social, for the provincial cities: Grenoble (1925), Vittel (1926), Mont-Dore (1926), Carcassonne (1926), Tarbes (1928), Pau (1928), and Toulouse (1931).

Keywords: Urbanisme, Musée Social, Law Cornudet, Société française des urbanistes, Paris, Ankara

序

世紀の転換期のフランスで建築でなく都市に関心を抱く建築家が現れ¹⁾、そのうちの数名の若手がローマのフランス・アカデミーで「工業都市 Une Cité industrielle」(1904)²⁾を描いたトニー・ガルニエ (Tony GARNIER: 1869-1948) の刺激を受けて、戦間期の都市計画に多大な功績を残した³⁾。代表者はオランダ⁴⁾、モロッコ⁵⁾、フランス、トルコで活躍したアンリ・プロスト (Henri PROST: 1874-1959)、フランスとギリシャ、インドシナで都市計画に従事したエルネスト・エブラール (Ernest HÉBRARD: 1875-1933)、スペインとドイツ、フランス、トルコで実績を挙げたレオン・ジョスリー⁶⁾ (Léon JAUSSELY: 1875-1932) である。

このうちジョスリーに着目すると、フランス国内の地方都市でも都市史の中で調査が進められており、具体的に計画案が取り上げられた都市もあるが、おそらく最初

に着目したのは、建築史家でなく人文地理学のヴァンサン・ベルドレらで、ミュゼ・ソシアル (Musée Social)⁷⁾ の都市・農村衛生部会 (Section d'Hygiène Urbaine et Rurale)⁸⁾ で3名の建築家と活躍したアルフレッド・アガシュ (Alfred AGACHE: 1859-1959) とともに論じられた⁹⁾。パリ¹⁰⁾ やポー¹¹⁾、トゥルーズ¹²⁾、グルノーブル¹³⁾ ほかにおけるジョスリーの都市計画の概説は多々ある¹⁴⁾ が、モノグラフはローラン・ドラクールの博士論文¹⁵⁾ をまとめ直したもののみで、これら数多くの地方都市に関する研究は一部を除き考察の対象外である¹⁶⁾。一方、バルセロナ¹⁷⁾、ベルリン¹⁸⁾、アンカラ¹⁹⁾ に関する先行研究は少なくないが、ジョスリーに着目したものは限られる。

ジョスリーが手がけた都市計画は、国内外を合わせて13点で、それらはパリ国立美術学校における都市広場の作品2点、バルセロナ、ベルリン、パリ、アンカラ

における設計競技の都市計画案、グルノーブルほかの全 7 都市の都市計画という、ほぼ年代順に全 3 期に大別できる²⁰⁾。本稿は、こうした研究状況を鑑み、都市計画に対する関心や視点の変化、設計手法の変遷、ジョスリーが果たした役割を明らかにするとともに、20 世紀前半フランスの新たな都市計画ユルバニスムの一端を論じたものである。

I 都市広場の提案—都市に対する関心の芽生え—

ジョスリーは、父親がトゥルーズで大工の家に生まれ、1890 年から地元の建築学校に学び、1892 年に弱冠 17 歳と半年でトゥルーズ市建築賞 1 等を獲得した。その賞金を元手に 1893 年からパリ国立美術学校で師事したのがドームとエスキエ (Daumet et Esquié) で、その後も受賞が相次ぎ²¹⁾、ジョスリーは賞金で 1898 年に 9 か月間イタリアを旅した。それは 2 回分に相当する価値のある快挙だと賞賛された²²⁾。

このうち 1902 年にシュナヴァール賞 (Prix de Chenavard) を受賞した設計競技の課題「民主主義大国の首都における人民広場」は経済学者シャルル・ジッド (Charles GIDE: 1847-1932) による社会経済 (Économie Social)²³⁾ の影響を受けて課されており、このほかの設計競技とは大きく異なるものであった。社会経済は、後のフランス都市計画家協会 (Société Française des Urbanistes) につながるフランス建築・都市計画家協会 (Société Française des Architectes Urbanistes) の設立母体ミュゼ・ソシアルにおける共通理念のひとつで、ジョスリーはこの課題の主旨に沿い「社会教育による精神面の民主化の実現²⁴⁾」を主題に、パリ 11 区のバステュー広場を破壊して、その周辺部にまたがる広大な広場を新たに描き出した (図 1)。この広場は国立美術学校で教育された建築の構成手法に基づき建築群を展開させることによって形成されたもので、対称軸を中心に描かれた当時の万国博覧会²⁵⁾ の会場計画によく似ていた。その規模は、ヴォージュ広場が取り込まれたという点からも明らかで、古典主義の大型の建築群がオベリスクと中心に広場を取り囲み、リヴォリ通り、つまり西に向かって開くような形で形成された²⁶⁾。これらの建築群は知力と体力を養う施設であるとされ、セヌ河岸側、すなわち南側の水浴場、温浴場、蒸気浴場からなる健康衛生館は、北側の図書館、講義室・会議場、保管庫、展示場、販売所、電気工場からなる産業・文学・科学街²⁷⁾ と向かい合う。一方、東側の中央は劇場と美術館、美術品取引所からなる芸術街で、中心の広場は古代ローマの公共広場フォーラムを想起させるものであった。つまりこの

設計手法は、国立美術学校で教育を受けた建築や美術に基づいており、このように広場を描くことで都市に対する関心が生まれるとともに、フランス芸術家サロン建築部門 3 等 (1902) の受賞がさらにそれを後押しした²⁸⁾。

ジョスリーがローマ賞 (1903)²⁹⁾ を受賞した課題「港に沿う大通りの公共広場」³⁰⁾ も同じ都市の広場で、次席 1 等のジャン・ヴィルオルスキー (Jean WIELHORSKY: 1874- 没年不詳) と次席 2 等のアンリ・ジュリ (Henri JOULIE: 1877-1969)³¹⁾ に勝った (図 2)³²⁾。こちらは課題「人民広場」と明らかに異なり、古代ギリシャや古代ローマに由来する古典の主題であったが、簡素さ、実用性、工夫を求める、当時の近代主義に基づいた建築そのものを問う課題でもあった³³⁾。その鍵は、全幅 350m 弱の敷地に対する、この広場を中心とした主要施設である取引所、軍事施設群、芸術施設群と庭園の配置であった³⁴⁾。上位 3 案は、いずれも正方形の広場の 3 辺を建築群が取り囲み、セヌ河岸に向かって開かれた、いわゆる同じ建築の構成手法に基づいた案に変わりなく、ジョスリーは課題「人民広場」で描いた芸術街、体力・衛生館、産業・文学・科学街を、順に取引所、軍事施設群、芸術施設群に置き換えた³⁵⁾。

つまりジョスリーがローマでガルニエに会う前から「人民広場」と「公共広場」という 2 つの都市広場を通して、都市に対する関心を高めており、また前者の課題でミュゼ・ソシアルにつながる社会改良の思想や理念に接していたことも重なり、さらにこれら 2 つの広場を描いた設計手法という点でも国立美術学校で教育されたものに基づいていることは確かなようである。

II 都市計画の設計競技—ユルバニスムの研鑽—

ローマのフランス・アカデミーでは、古代ローマ都市に取り組むポール・ビゴ (Paul BIGOT: 1870-1942)、ネルヴァのフォルムに着手したジャン・ユロ (Jean HULOT: 1871-1959)、すでに顔なじみのプロストが待っていた。最終成果、ポンペイの公共広場の復元 (1910) は、関心が都市にあることを示しているが、ユルバニスム (Urbanisme) に多大な影響を及ぼすさらなる契機は、おそらくジョスリーが到着直後に着手したバルセロナ都市開発・拡張国際設計競技の受賞であったに違いない。2 度目のローマであったジョスリーの関心は、皆が着目した古代や中世、近世でなく現代であったということである。その案の名称、ローマの伝説上の建設者「ロムルス Romulus」は、単に建築でなく都市に対する関心を示した証左である。

バルセロナ市が 1903 年 7 月 9 日に開催した設計競技

の課題は高度成長に合わせて、土木技師で都市計画家のイルデフォンソ・セルダ (Ildefonso CERDÀ: 1815-76) が扱わなかった郊外地の検討であった。「ロムルス」案は、ジョスリーによる概念図³⁶⁾から、建築の配置が鍵であった課題「人民広場」と「公共広場」とは全く異なり、「居住」、「産業」、「商業」という全3点の用途地域、つまりゾーニングの提案であったことは明らかで、大通り (avenue) という3本の基軸がこの都市全体を網羅する道路網の基準となるように描かれた (図3)。

バルセロナ市に提出された図面 (1904) は18点の全体図と11点の詳細図、4点の補足資料で、肝心のゾーニングは17に細分化されていた。本案は、「工業都市」に倣い、主に居住地域、公共施設、商業施設、工業地帯、公園を合理的かつ機能的に配置することを具体的に提案し、さらに将来像が人口増加に対応しつつ成長する都市を1910年から1958年までの全5段階のモデルで展開したものであった³⁷⁾。こうした順を追った提案は、当時バルセロナにはパリやロンドンに比べて都市圏を広げるための余地があまりないと考えられていたからである³⁸⁾。中央に広場を設けた大通り、その両側に対を成すように配置された公共施設、公園と緑地のネットワークは、セーヌ県知事ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン (Georges-Eugène HAUSSMANN: 1809-91) による前世紀のパリと同じような形をしている部分に相当するが、当時バルセロナにとっては画期的なものであった。

バルセロナにおけるもうひとつの成果は、都市計画 *urbanisme* に関してである。ジョスリーがセルダの理論書「都市計画全論³⁹⁾」を学び、スペイン語の *urbanización* に基づいた *urbanisme* を母国に伝えて、いわゆるタウン・プランニング *Town Planning* の普及に尽力した点である。フランスで都市を考える際の語彙「都市芸術 *art urbain*」の代替は、ジョスリーが1905年に芸術面ばかりでなく *art urbain* にない社会や経済、防衛等を含む *urbanisme* を“*d’urbanisateur*”を“*d’urbaniste*”の意で用いた⁴⁰⁾。都市計画 *urbanisme* はこうして単に建築を中心とした芸術の一部ではなく、より広範な領域に及ぶ科学であると考えられるようになる。ジョスリーは当時すでにこうした一面を把握しており、その発展に寄与したのである。

基軸に基づく交通網と、合理的かつ機能的な用途地域の組み合わせは、1909年ベルリン都市計画設計競技でも有効であった⁴¹⁾。主題は人口600万人、開発期間30年、南北側20km、東西側25kmの範囲に対する首都ベルリンの都市改造で、結果はヘルマン・ヤンセン (Hermann JANSEN: 1869-1945) 案とジョゼフ・ブリックス (Josef



図1 シュナヴァール賞設計競技案：人民広場、1902、鳥観図

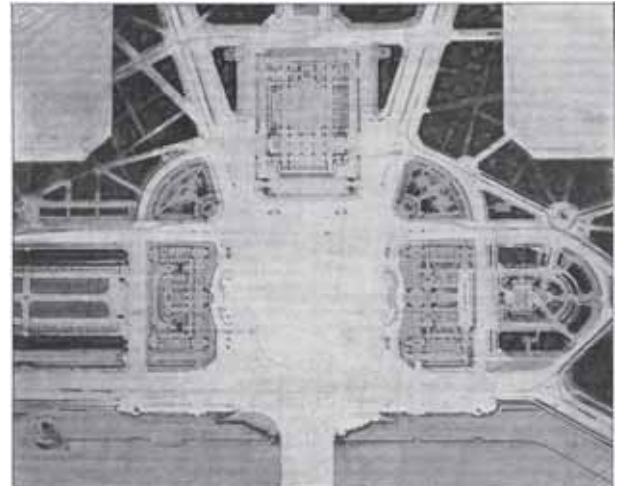


図2 ローマ賞：公共広場、1903、配置図



図3 バルセロナ設計競技案、1904



図4 ベルリン設計競技案、1909

BRIX: 1859-1943)、フェリックス・ゲンツマー (Felix GENZMER: 1856-1929) の案が 1 等に選出され、シャルル＝アンリ・ニコ (Charles-Henri NICOD: 1878-1967) と手がけたジョスリーの案は入選に及ばなかったが、バルセロナで開発したこれら 2 つの手法の成果が如実に表れた。

課題はゾーニング、グリユネヴァルドの森の道路と散歩道のネットワーク、鉄道網の整備、都市の開発と拡張であったが、ジョスリーはベルリンを国の心臓部として機能する真の巨大都市に発展させるため、求心性を尊重した構成を採用した (図 4)⁴²⁾。こうした方針が最も顕著に示されたのが、中心部から郊外地に向かい放射状に展開する数多くの鉄道網であった。中心からシュプレー川の北側と南側に環状線とそれら 2 つの環状線からなる中心部のひとつの環状線、その外側の第二環状線がいずれも同心円状に配置され、さらにその外側を第三環状線が巡る。そして中心から郊外に向かう放射状に展開する鉄道網と、これらの交差部のうちの 10 か所に交通網の結節点が設けられるという提案であった⁴³⁾。Urbanisme の語源の一部、ラテン語の「ウルブ Urbs」と名付けられたジョスリーの案はその名の通り、中心部、大学、工場、水辺、森林、庭園、公園などの土地利用を 30 点にも及ぶ極めて詳細な区分に基づいて地域毎に定められており、居住、産業、商業等の用途地域ばかりではなく、これら以外の都市を構成する要素を含むそれぞれの用途地域が明示された⁴⁴⁾。ジョスリーはバルセロナで提案した道路網の構成を、ベルリンでは交通網に置き換える形で反映させるとともに、およそ倍に相当する細分化された綿密な区分の検討に基づく土地利用計画を、より広範な範囲に対して提案したのである。つまりガルニエに学んだ手法をバルセロナで試みた後、さらにベルリンでより綿密な検討に基づく提案に発展させたということである。

ジョスリーはその後、これら 2 ヶ国における実績を踏まえて、こうした新たな都市計画ユルバニスムに基づく提案を母国の首都パリで示す機会を得た。それは第一次大戦直後、下院議員オレノ・コルニュデ (Honoré CORNUDET: 1898-1924) が推進したフランスで最初の都市計画に関する法律⁴⁵⁾に基づき、セーヌ県知事オーギュスト・オートラン (Auguste AUTRAND: 1858-1949) が開催した、審査日が 1919 年 3 月 26 日のパリ拡張設計競技であった⁴⁶⁾。コルニュデ法は第一次大戦以前に都市・農村衛生部会で検討されたもので、建築家は、本法の基本方針「開発・拡張・美化 aménagement, extension et embellissement」をそれぞれ組み合わせる

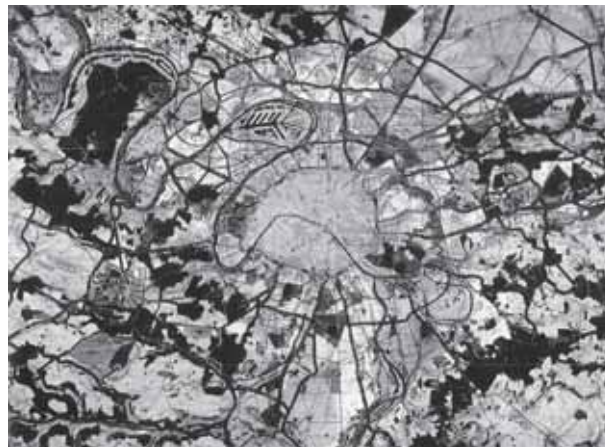


図 5 パリ設計競技案、1919

形で基本計画を策定した⁴⁷⁾。しかしこの設計競技につながる都市の拡張と法律の制定という方針と制度は、第一次大戦以前、パリ城壁が軍事から衛生の問題に転換した後、ウジェーヌ・エナール (Eugène HÉNARD: 1849-1923)⁴⁸⁾や造園家ジャン＝クロード＝ニコラ・フォレストイエ (Jean-Claude-Nicolas FORESTIER: 1861-1930)⁴⁹⁾、ルイ・ボニエ (Louis BONNIER: 1856-1946)⁵⁰⁾らによる城壁および郊外の開発案と、フランス都市計画家協会の設立に尽力した建築家たちによるコルニュデ法の検討を促したミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会の功績にはかならない⁵¹⁾。ジョスリーは第一次大戦後の国際関係を考慮して、パリがフランスの首都であり、経済圏の中心になり、都市周辺部の中心地となり、そして密度の高い都市圏の中心となるように⁵²⁾、高密度で、複合的で、非常に階層化された交通システムに基づき経済活動を向上させるひとつの組織体のような都市を描いた。それは都市圏のテイラー・システムという構想が透けて見えるような提案であった。

こうした構想は、パリを中心とした行政区画に臆することなく、パリ城壁の内外の関係や利益が一致するように、それぞれ別の図面で示された緑地、道路、鉄道、水運のネットワークによって示された (図 5)⁵³⁾。北西のジャンヌヴィリエに描かれた物流の拠点はその象徴的な存在で、こうした提案は計画地の範囲や検討の対象および視点という点で、エナールらのものばかりでなく、ジョスリーがすでに手掛けたバルセロナやベルリン、さらに後述するアンカラも含めて、これらの案を凌駕する異例であったといえる。

一方、バルセロナやベルリンで鍛錬された均衡ある新たな手法はアンカラで有効性が示された。この都市は 1923 年にムスタファ・ケマル・アタテュルク (Mustafa Kemal ATATÜLK: 1881-1938, 在位 1923-1938) がトルコ共和国を建国し、オスマン帝国の首都コンスタンティ

ノーブルに代わる新首都に定めた、高度 850m、人口 20,000 人の小都市で、この都市の開発は、それを委ねられたドイツの建築家・都市計画家カール・クリストフ・ロルヒャー (Carl Christoph LÖRCHER: 1884-1966) が、1924 年にビザンティン様式の城壁で囲まれた旧市街を破壊し、格子状及び放射状の道路を巡らして、居住地域のほかに官庁街、教育研究施設、病院などの公共施設、さらに公園や広場を整備する計画案を描いたことにはじまる⁵⁴⁾。ロバの通る小道が非常に入り組んだ旧市街はほぼすべて破壊され、官庁街になる周辺部を含む地域全体が近代都市に生まれ変わることを示唆したものであった。さらにロルヒャーは、翌年に開発の対象地域を南側に拡張して、用途地域が全 16 点の土地利用計画と住宅地計画を兼ね備えた計画案を策定した。しかし出資者がこの案を拒否し、より広範な地域を対象にした計画案を求めたため、1927 年にアンカラの都市拡張に関する設計競技が開催された。参加者は、ベルリンの設計競技で 1 等のヤンセンとブリックス、在トルコ・フランス大使アルベール・サロー (Albert SARRAUT: 1872-1962) が両ドイツ人に再会させるために推したジョスリーの 3 名で、このうち設計競技の趣旨に添ってもっとも広範な範囲を対象とした案を描いたヤンセンが 1 等に選出され、ジョスリーは旧市街の破壊、首都における工業地域の規模、計画案の密度が敗因となり、受賞を逃した⁵⁵⁾。

ジョスリーの計画案は、旧市街および南側の開発地に対する 1925 年のロルヒャーの計画案を踏襲したものであったが、その骨格は全く異なるものであった。ベルリンの鉄道網の提案と同様に、旧市街から南側の広大な開発地を連結させるため、南北の傾斜地を考慮しつつも、全 20 点に及ぶ各省庁の庁舎で形成された新たな共和国広場を中心に⁵⁶⁾、大小 2 つの環状道路が整備されることを示すとともに、その内側ばかりでなく郊外地の外側にも向かって放射状の街区が形成されることを提案したからである (図 6)⁵⁷⁾。土地利用計画は、旧市街の北東が工業地域、北西が議員用住宅地、共和国広場を中心に新市街の西側と南側に学校と運動場、商業施設を中心に

外側の集合住宅と内側の戸建住宅で構成された郊外住宅地⁵⁸⁾、西端部に競技場、東端部に墓地、点在する公園と帯状の散歩道が提案された⁵⁹⁾。そして、この広場の上段、対称軸線の焦点に大統領府が配置され、この基本計画の構成に求心性が与えられた。

ミュゼ・ソシアルは政治家や軍人、大使らを通して国外に派遣する建築家を決定する情報網の役割を果たしていた。サローは、北アフリカのprost、東南アジアのエブラールのようにジョスリーを中東に位置付ける契機をもたらしたが、受賞を逃したジョスリーは国内の地方都市で着実に功績を残すこととなった。

III 都市計画の実践—ユルバニスムの運用—

ジョスリーは第一次大戦後、バルセロナ、ベルリン、パリ、アンカラの設計競技における実績の経験とこの間に得た新たな都市の設計手法、さらに自らも準備に参画したコルニユデ法に基づいて、およそ 15 年間にモン＝ドール (1919-25)、グルノーブル (1921-27)、タルブ (1923-27)、ヴィツテル (1923-28)、トゥルーズ (1920-32)、ポー (1925-33)、カルカソンヌ (1924-34) という国内の全 7 都市で設計競技による提案にとどまるばかりでなく、実現性の高い業務、すなわち都市計



図 6 アンカラ設計競技案、1927



図 7 PAEE 案、モン＝ドール、1919-25

画の実践に着手した。いずれも地方自治体からコルニユデ法に基づいた都市計画案（以下、PAEE: Les Plans d'aménagement, d'embellissement et d'extension と記す）を策定する業務依頼に応える。当時のフランスの建築家たちは第一次大戦後の戦災復興のために、本法に基づく都市計画を手がけたが、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会で活動した建築家、フランス都市計画家協会の創設者の中で、おそらくジョスリーほど数多くの事業を手がけた建築家は見当たらない。当時フランス国内でコルバニスムの第一人者と見なされていたジョスリーに地方都市から相次いで声がかかったということである。

ジョスリーが最初に PAEE⁶⁰⁾ の策定に従事したのは、パリの設計競技に参画した同年で、南北に細長く深い山間にある温泉地の小都市モン＝ドールであった（図 7）。土地利用の指標は、小都市ながら、設計競技と同様に、森林や河川も含めて全 17 点に及んだが、主な用途地域は北側の産業、中央の細長い商業、その両側の斜面の居住の 3 点に限られており、このほかの区分は公園や庭園などの未開発地であった。主な建築の提案も広場のアーチ、アーケード、温泉地の主要施設である浴場の拡張、ドルドーニュ川を挟んで対岸のカジノにとどまっております、交通計画や都市施設でなく、いずれもこうした自然地が対象であった⁶¹⁾。つまりモン＝ドールは開発地域よりもむしろ未開発地に対するものが主体であったが、設計競技で養った新たな手法で土地利用の在り方を提示した一例であることには変わらない。また、都市の規模と地形が異なるため、この他の都市と比較の対象にすることは難しく、地権者による抵抗、同市による変更案、さらにジョスリーの拒否が重なり、PAEE の策定がプロストに依頼されることになったという点からも異例の都市であった。

おそらく最も大きな期待を寄せたのはモン＝ドールと同年に着手した、イゼール川の南側に広がるグルノーブルで、その主な検討課題はさらに南側の都市の開発であった（図 8）。市はアール・デコ博と同年に水力発電国際博覧会（Exposition internationale de la houille blanche de 1925）⁶²⁾ を企画し、都市計画の中心地に敷地を用意して、主要展示館とともに会場計画を委ねて、その促進を図った⁶³⁾。PAEE⁶⁴⁾ で重視されたのは、コルニユデ法が定める方針のうちの拡張と美化で、中央駅舎の南側に計画された広大な工場地帯および 7 つの地域に区分された郊外地を含む計画地全体の開発と、これらの地域に北側の 3 か所および南側の 1 か所それぞれに描かれた公園の配置であった。地域毎の計画内容はこの



図 8 PAEE 案、グルノーブル、1922 年 1 月



図 9 PAEE 案、タルブ、1923-27



図 10 PAEE 案、ヴィッテル、1923-28

2 つの方針に合致しており、特に後者はたとえば工場地域に至るまで建蔽率 80%、最高高さ 20m などのように道路幅員、建築用途、建蔽率、最高高さ及び階数、中庭の広さなど、地域それぞれに対して詳細が定められ、街区形成の美化が遂行された⁶⁵⁾。河川の南の旧城壁の内

側の街区の周囲では、街の東西および南北に抜ける鉄道と道路網が検討され、環状道路及び中心部に抜ける目貫通り、その端部の街区、北東に先述の博覧会会場が用意された⁶⁶⁾。会場は城壁址の破壊と整地により実現したもので、既存街区と計画地の空地に用意された点からも博覧会の意図のひとつが読み取れる⁶⁷⁾。つまりグルノーブルでは、法律の方針に適応させた具体策の提案と建築の単位に至るまでの緻密な検討に基づく計画案が提示されたことになる。

ジョスリーはモン＝ドールとグルノーブルの後、同時にタルブとヴィッテルに着手し、同様に実践的な課題に直面した。タルブ⁶⁸⁾で重視したのは開発と拡張で、このうち前者は中央駅舎の南に位置する既存の中心市街地で実施された、街区の破壊を伴う円形交差点と道路の新設および拡張であった(図9)⁶⁹⁾。この開発計画とともに検討された拡張は、1925年5月に道路の断面計画とともにまとめられたものには描かれておらず1927年の公開案に示された⁷⁰⁾。ジョスリーは駅舎と工場、兵舎、公園、庭園を除く地域に、既存の街区から郊外地に向かって点在する円形交差点をつなぐように道路網を整備するとともに、南北に墓地、西側に公園、南側にスポーツ公園を描き、中心市街地と郊外地が連続する都市の拡張を提案した。こうした都市の拡張はヴィッテルのPAEEでも示された(図10)⁷¹⁾。この都市は南北に走る鉄道と直行する目貫通りで構成されており、それに沿う4つの既存の街区の外側に矩形広場が用意され、それぞれの中心に道路網が整備された郊外地と、4つの郊外地をつなぐ環状道路の拡張が提案された⁷²⁾。この目貫通りに沿う北東の一面は温泉施設が展開する地域で、開発および拡張の対象外であったが、グルノーブルと同様に目貫通りに沿う既存の街区は、既存建築の破壊と道路の新設および拡張によって中心市街地と郊外地のつながる都市が描かれた。

トゥルーズ⁷³⁾は、ジョスリーがコルニユデ法の制定の翌年から検討をはじめた都市で、1928年のPAEEで現状が航空写真⁷⁴⁾で示されたように、モン＝ドール以下の4つの都市よりもはるかに規模が大きかった(図11)。中心市街地における既存の建築の破壊と道路の新設および拡張は、グルノーブルをはじめ同様に計画されており、ヴィッテルのように、公園や広場を組み合わせた道路網および環状道路の整備による郊外地の開発も合わせて描かれた。さらに産業地域、戸建て住宅地、旧郊外地の集合住宅地、中心市街地という全4点の地域に分割する土地の利用計画も示された⁷⁵⁾。産業地域を除く3つの地域は、中心市街地の周りに旧郊外地の集合住宅地、

その周囲に戸建て住宅地が円環を成すように配置されており、西側の新たな郊外地を除くと、産業地域が南北それぞれに点在するように計画されている⁷⁶⁾。このような全体ばかりでなく、現在稼働する既存の工場への配慮、最高高さ20m、建蔽率80%と定められた産業地域のように、建築の基準に至るまでの調査と立案の対象であった。1931年のPAEEは、1928年の案を踏襲しつつ、中心市街地、集合住宅地、戸建住宅地、産業地域に学

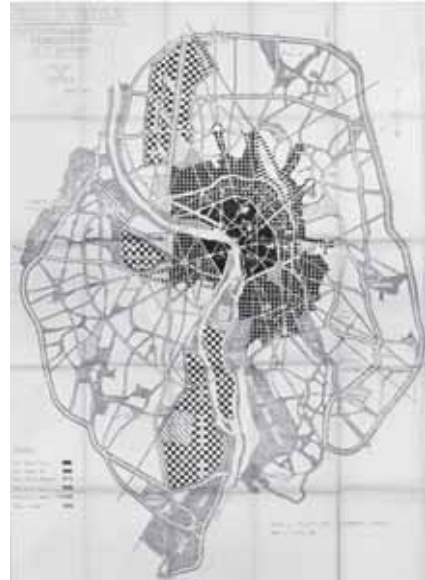


図11 PAEE案、トゥルーズ、1920-1932



図12 PAEE案、ポー、1925-33



図13 PAEE案、カルカソンヌ、1924-34

校、全 2 種の公園・庭園、墓地、鉄道網を加えたもので、グルノーブルやタルブと同様に郊外地の大型公園ばかりでなく大通りの周囲にも緑地を巡らし、その街区内の各所に小さな公園・庭園を整備するという美化に該当する一面が加えられている。土地利用の指針が貧弱であった点が批判の対象になったが、このほかの都市よりも開発・美化・拡張の均衡は保つ案が描かれたものであった。

ポー⁷⁷⁾は、ポー川を挟み南北が分断された絶壁の上に広がる北側の大地に発達した観光都市であるが、商業⁷⁸⁾と産業に課題を抱えていたため、北側と東側におよそ 3,000ha の郊外地を開発し、人口 80,000 人の都市を想定して、中心市街地および開発対象の郊外地と、開発対象の郊外地のみの地域に南北で分割して、2 段階で順を踏んで都市拡張を促す案が検討された⁷⁹⁾。これまでも設計競技では、都市の成長を複数の段階に分割して提案された案もあったが、ジョスリーが具体的に提案したものは稀有である。PAEE は絶壁の北側に連なる既存の公園のさらに北側の既存の居住地域の周囲に、その周囲を新たな緑地帯で囲まれた北東の工場地域を除き、道路の両側に緑地帯を設けた新たな良好な居住地域が、ポーの森とその南側の競馬場まで続くことを示した計画案で、土地利用の指針は新旧の居住地域と、この都市の課題に対応した工場地域の合計 3 点にまとめられており、ゾーニングの面でトゥールーズよりも明らかに散漫な計画であった(図 12)⁸⁰⁾。

このように郊外地の拡張はタルブやヴィッテル、トゥールーズのように同心円状に開発されることが検討されてきたが、モン＝ドール、グルノーブル、ポーのように山岳地や河川、断崖などの地形が原因で、こうした開発手法が困難な都市もあった。歴史都市カルカソンヌ⁸¹⁾はオード川の右岸に城塞都市があり、さらに左岸には 13 世紀のバステード「サン＝ルイ」(Bastide Saint-Louis) 後の格子状街区の都市が広がる。そのため前述の 6 都市とは異なる形で PAEE が検討された(図 13)。ジョスリーが都市の拡張を計画したのは、これら 2 つの歴史都市およびそのさらに西側の小さな既存の街区の周辺部で、前述の 6 都市と比較すると、その規模ははるかに小さく東西の提案は道路網の整備にとどまり、東側に至っては北の市場と東の墓地および見晴台しか描かれなかった。これがカルカソンヌにおけるジョスリーの拡張に対する回答であった。

一方、オード川の左岸に沿って西側から描かれた病院、内港、庭園、市庁舎・学校・劇場、その背後の庭園は、既存街区の破壊と道路の申請および拡幅による開発を提案したものであった⁸²⁾。その対象となる中心地には既

存の格子状の街区とは全く異なる形の円形交差点とそれに対応した新たな道路網の整備が示されており、さらにその周辺部にスポーツ施設や遊歩道が計画された。

結

本稿は、フランスの建築家・都市計画家レオン・ジョスリーが生涯に手がけた全 13 都市の都市計画の変遷を追い、次の 3 点を明らかにした。第 1 は、ジョスリーが都市広場の提案に基づき都市に対する関心の芽生え、国内外の大都市における設計競技の実績、自らが準備に参画した法律の方針に対応した計画案の策定という 3 つの段階を経ることにより、前世紀の都市改造とは異なる 20 世紀の新たなフランス都市計画の実例を着実に残した点である。ジョスリーの関心や視点の対象と、都市計画の手法はこれら 3 つの段階の間に、国立美術学校で培った建築の設計手法の応用、社会調査やガルニエ、国外における研鑽に基づく新たな手法の開発、都市毎に異なる実情への配慮とこの新たな手法による計画の両立という形で大きく変化した。こうしたジョスリーの修練の蓄積がユルバニスムの発達に一役買う働きをしたものと考えられる。

第 2 は、ジョスリーがこれらの 3 つの段階を経て、複数の円を同心円上に展開した都市構造の基本モデル、調査結果に基づく用途地域、土地利用計画、ゾーニング、郊外地の街区形成のための放射状の曲線を用いた道路網、旧市街と新市街あるいは既存都市と郊外地が連続した都市の構造、設計競技に学ぶ自然地形や歴史遺産の保全を次々に提案し、これらの新たな手法を組み合わせることで数多くの実例を残した点である。建築の設計手法の応用は構成手法のひとつで、建築ばかりでなく美術に基づくものであるが、ジョスリーが人口等の指標や統計、法律、調査結果などのさまざまな観点に基づき都市計画案を描いた新たな手法は前者とは明らかに異なり、ユルバニスムを科学の一種であるという捉え方はこうした手法の一面に基づいている⁸³⁾。

第 3 にル・コルビュジェ (Le Corbusier: 1887-1965) をはじめ、第一次大戦後、コルニユデ法に後押しされ、数多くの建築家たちが都市計画を手がけるようになるが、設計競技における多大な実績と地方都市における多数の実例を残したジョスリーは、このような建築家の中でも 20 世紀の初頭からミュゼ・ソシアル、都市・農村衛生部会に所属しつつ、フランス建築家・都市計画協会、フランス都市計画家協会の創設に参画するとともに、法律の整備や実践を踏まえた高等教育にも従事しており、20 世紀フランスにおける新たな都市計画ユルバニスム

を牽引し、中心的な役割を果たした建築家・都市計画家のひとりであると捉えることができる。

20世紀前半のフランス近代建築史では国立美術学校の建築家たちは、前世紀のボザール建築の興隆と比較し、低迷と捉えられている。しかし当時の先駆者は、ミュゼ・ソシアルを後ろ盾に、建築でなく都市に着眼した後、設計競技でユルバニズムを探求しつつ、同業者協会組織の設立、法律の制定、教育機関の創設⁸⁴⁾、雑誌の創刊⁸⁵⁾、会議の開催⁸⁶⁾などの枠組みを整えて、第一次大戦後の戦災復興を契機に新たな都市計画の実績を重ねた。こうした点に、当時の建築家たちの力点が建築から都市計画に傾倒したという1面が指摘できる。ジョスリーはこのような枠組みの中で国内外における設計競技と新たな都市計画の実施で、類例のない実績を上げたユルバニズムの開拓者のひとりなのである。

図版出典

図1 : La Ville, art et architecture en Europe 1870-1993, 1994, p.169, (Coll. privée, Montréal.)

図2 : *La Construction moderne*, 8 août 1903, p.532.

図3 : 312AA1/3, CAA.

図4 : 312AA25, CAA.

図5 : 312AA32/1, CAA.

図6 : 312AA32/1, CAA.

図7 : 312AA10/11, CAA.

図8 : 1997/025/143, ANMT.

図9 : 312AA1/21, CAA.

図10 : 312AA29, CAA.

図11 : 312AA31, CAA.

図12 : 101/16, Archives Communautaires Pau.

図13 : 1997/025/293, ANMT.

CAA: Centre d'archives d'architecture du XXe siècle de la Cité de l'architecture et du patrimoine. ANMT: Centre des archives du monde du travail de Roubaix des Archives Nationales du Monde du Travail.

註

1) FRAMPTON (Kenneth), *Modern Architecture, A Critical History*, London: Thames & Hudson, 1992 (中村敏男訳『現代建築史』青土社、2003年、177-184頁。)

2) GARNIER (Tony), *Une Cité industrielle, Étude pour la construction des villes*, Paris: Auguste Vincent, 1918. (吉田鋼市編・訳・著『トニー・ガルニエ「工業都市」注解』中央公論美術出版、2004年。)

3) ガルニエの翌年にローマのフランス・アカデミーに

到着した若手はビゴで、その後ユロ、プロスト、ジョスリー、スプリトのディオクレティアヌス宮殿のエブラールが続き、その後も古代ギリシャのデロス島のカミーユ＝エミール・ルフェーブ (Camille-Émile LEFÈVRE: 1867-1946)、古代都市プリエネのパトリック・ボネ (Patrice BONNET: 1879-1964)、アテネのアクロポリスのニコが都市に関心を抱いた。

4) 三田村哲哉「1910年アントウェルペン都市圏改造国際設計競技1等案—アンリ・プロストによる建築と都市計画に関する考察 その1—」『日本建築学会計画系論文集』第658号、日本建築学会、2010年12月、2999-3004頁。

5) 松原康介『モロッコの歴史都市、フェスの保全と近代化』学術出版社、2008年。

6) ガルニエのローマ滞在は1903年末日までのため、同年12月28日に到着したジョスリーは数日のみしか重なっておらず、ほぼ入れ違いの状態であったが、「工業都市」に刺激を受けたひとりとされる。ジョスリーは帰国後、地元トゥルーズ、パリやボルドーで美術館や印刷局、集合住宅、住宅など、数多くの建築を手がけるとともに、1914年に郵便・電信・電話省主任建築家になり、パリ45番郵便局(1928)、ボルドー中央郵便局(1929)、ランヌムザン郵便局(1930)、トゥルーズ郵便・電信・電話地方局(1932)を残した。

7) 第三共和政下のフランスで、国家に介入されない社会改良を志した指導者たちが集まり、1894年にアルベール・ド・シャンブラン伯 (Joseph Dominique ALDEBERT DE CHAMBRUN: 1821-99) の出資に基づき、民間の公益団体としてミュゼ・ソシアルが創設された。主な活動は労働組合、社会保険、対外関係などの調査、検討、提言で、その手法はパリ万国博覧会開催を主導した土木技師、社会学者、政治家のフレデリック・ルプレー (Frédéric LE PLAY: 1806-82) に多大な影響を受けた社会調査に基づく。

8) 都市・農村衛生部会は1908年に低廉住宅の建設と都市計画の導入を検討するために設立された。建築や都市に関心ある建築家は総裁ジョルジュ・リスラー (Georges RISLER: 1853-1941) の下、ウジェーヌ・エナール (Eugène HÉNARD: 1849-1923) やボニエの周囲に集まった若手アガシュ、エブラール、フォレストイエ、ジョスリーらで、さらにプロスト、アルベール・パランティ (Albert PARENTY: 1877-1953)、造園家エドゥアール・ルドン (Édouard REDONT: 1862-1942)、アンドレ・ベラル (André BÉRARD: 1871-1948) が加わり、フランス建築家・都市計画家協会の設立、フ

ランス都市計画家協会への改定など、戦間期フランスの都市計画を牽引する者たちの母体が形成された。その後、元は測量士のルネ・ダンジェ (René DANGER: 1872-1954)、ジャン=マルセル・オビュルタン (Jean-Marcel AUBURTIN: 1872-1926)、アドルフ・デルヴォー (Adolphe DERVAUX: 1871-1945)、ジャック・グレベール (Jacque GRÉBER: 1882-1962)、歴史家で都市理論家のマルセル・ポエト (Marcel POËTE: 1866-1950)、都市理論家のガストン・バルデ (Gaston BARDET: 1907-89)、ウジェーヌ・ボドウアン (Eugène BEAUDOUIN: 1898-1983) らが加わり、20世紀前半フランスの新たな都市計画、ユルバニズムの萌芽期に大きな影響を与えた。

9) BERDOULAY (Vincent), *La Formation de l'école française de géographie 1870-1914*, Paris: Bibliothèque nationale, 1981.

10) GUIYOT-CORTEVILLE (Julie), DEGUILLAUME (Marie-Pierre), *Aux origines du Grand Paris, 130 ans d'histoire* [cat. exp. du 12 octobre 2016 au 28 mai 2017 au Musée d'histoire urbaine et sociale Suresnes] Paris: Région Île-de-France, 2016.

11) DUSSOL (Dominique), *Pau art déco, arts, histoire et société, 1919-1939*, Bordeaux: Le Festin, 2011.

12) Conseil d'architecture, d'urbanisme et de l'environnement de la Haute-Garonne, École d'architecture de Toulouse, *Toulouse 1920-1940, La Ville et ses architectes*, Toulouse: Ombres, 1991.

13) PARENT (Jean-François), *Grenoble, Deux siècles d'urbanisation, Projets d'urbanisme et réalisations architecturales 1815-1965*, Grenoble: Presses Universitaires de Grenoble, 1982.

14) TOUTCHEFF (Nicole), “Léon Jaussely, Les Débuts de l'urbanisme scientifique en France”, *La Ville, art et architecture en Europe 1870-1993*, [cat.exp., du 10 février au 9 mai 1994 au Centre Georges Pompidou, Paris] Paris: Culture Technique, numéro spécial, 1994, pp. 169-170.

15) DELACOURT (Laurent), sous la direction de NOVARINA (Gilles), *Léon Jaussely (1875-1932), Un Urbanisme éclectique*, Thèse de doctorat, Urbanisme et architecture, Grenoble 2, 2007.

16) DELACOURT (Laurent), *Léon Jaussely, Un pionnier solitaire*, Paris: Édition du Patrimoine, 2017.

17) 阿部大輔『バルセロナ旧市街の再生戦略、公共空間の創出による境界の回復』学芸出版社、2009年。

18) BODENSCHATZ (Harald), *Berlin Urban Design, A Brief History of a European City*, Berlin: DOM, 2013.

19) 土田哲也、土肥真人「トルコ共和国アンカラ新首都建設における近代都市計画技術の受容」『都市計画論文集』日本都市計画学会、no.42-3、2007年、358-390頁。

20) ジョスリーが都市計画を手掛けたフランス国内外の都市はパリ国立建築・遺産博物館とルーベ国立労働文書館で特定できる。

21) ジョスリーはローマ賞のほか、大西洋定期船埠頭でアメリカ建築家ルネサンス賞 (1897) を、野外劇場でショドセグ賞 (1897) を、狩猟小屋の大会議室に設ける記念碑のような暖炉などでルージュヴァン賞 (1899, 1903) を、人民広場でシュナヴァール賞 (1902) を、アルジェリア総督宮でラバル賞 (1903) を受賞した。

22) GRANVAL (Louis de), “Une Victoire Toulousaine”, *L'Art méridional*, no.247, 1^{er} avril 1905, pp.25-27.

23) 19世紀のフランスでは、経済的な価値を重視する政治経済学が政策を牽引したが、こうした価値あるものを生み出す労働者に着目した社会経済学が発展した。ル・プレーは1867年と1889年パリ万国博覧会で社会経済学部門を設置するなどの新たな試みを展開し、社会調査に基づく労働・社会問題に対する関心が高めて、社会の改良を志す指導者の中で共有されるもののひとつとなった。

24) Anonyme, *Les Concours Chenavard (section d'architecture) à l'Ecole nationale des beaux-arts*, Paris: A. Vincent, 1909, pl.14.

25) フランスは1878年、1889年、1900年パリ万国博覧会でジャン・ド・マルスやエスプラナード・デ・ザンヴァリッドに巨大な展示館がコの字型に大きな広場を囲むように建設された。

26) 概念図で示された広場には、あらゆる角度から放射状に道路が集まる交通の要所でもある。Fonds Léon Jaussely 312AA1/2.

27) 当時主な課題は保健衛生であったが、都市における産業の位置付けも求められていた。

28) Anonyme, “Salon des artistes français”, *La Construction moderne*, Paris, 7 juin 1902, p.432.

29) RIVOALEN (E.), “Concours du Prix de Rome”, *La Construction moderne*, Paris, 11 avril 1903, pp.328-330.

30) 候補者10名の中にローマ賞を受賞するルフェーブル、エブラール、ニコがいた。第2課題は大浴場で、ジョスリーはグラン・パレ (1900) を想起させる案を描いて、高く評価された。

31) 次席1等のヴィルオルスキーの案も、同2等のジュ

りの案も取引所の位置に欠点があった。落選案はいずれも広場の取り方、もしくはこの取引所の配置を巡って議論された結果に基づく。

32) Anonyme, “Académie des beaux-arts”, *La Construction moderne*, Paris, 1^{er} août 1903, p.528.

33) PLANAT (P.), “Actualités, Le Grand Prix de Rome”, *La Construction moderne*, Paris, 1^{er} août 1903, pp.517-520.

34) Anonyme, “Le Grand Prix de Rome”, *La Construction moderne*, Paris, 8 août 1903, pp.532-533.

35) RUMLER (E.), “Académie des beaux-arts”, *La Construction moderne*, Paris, 1^{er} août 1903, pp.520-521.

36) JAUSSELY (Léon), *Projet de Raccordement du faubourg de Barcelone avec les villages annexés, Plan schématique des trois grandes divisions, Habitations, Industries, et Commerce, 1907*. Archives privées.

37) JAUSSELY (Léon), “Romulus”, *Projet lauréat du concours internationale d'avant-projet de raccordement du faubourg de Barcelone avec les villages annexés, 1904*, Planche no.15-18.

38) JAUSSELY (Léon), *Plans comparatifs des parcs et jardins entre Paris-Londres-Barcelone, 1904*, Planche no.12.

39) CERDÀ (Ildefonso), *Teoría general de la urbanización y aplicación de sus principios y doctrinas a la reforma y ensanche de Barcelona*, Madrid: Imprenta Española, 1867, (LOPEZ DE ABERASTURI (Antonio) traduire, CHOAY (Françoise) traduire, *La Théorie générale de l'urbanisation*, Paris: Seuil, 1979.)

40) 都市計画 Urbanisme の初出は 20 世紀の初頭で、ジョスリーによる指摘に基づくものは、リヨン商業専門学校校長で地理学教授のピエール・クレルジェ (Pierre CLERGET: 1874-1962) による論文の主題の中で用いられたものであるとされる。CLERGET (Pierre), “L'Urbanisme, Étude historique, géographique, et économique”, *Bulletin de la Société Neuchâtoise de Géographie*, Neuchatel: Imprimerie Attinger Frères, Tome XX, 1910, pp.213-231. JAUSSELY (Léon), “Chronique de l'urbanisme”, *La Vie urbaine*, Paris, no.1-2, mars-juin 1919, p.187. 初出はクレルジェによる 1900 年の Revue Romande 誌のものがある。

41) 開催は 1908 年 10 月で、締切は 1909 年 12 月、1909 年 12 月 16 日付のプティ・タン紙 (*Le Petit Temps*) に掲載された。

42) BODENSCHATZ (Herausgeber Harald), GRÄWE

(Christina), KEGLER (Harald), et.al., *Stadtvisionen 1910-2010, Berlin, Paris, London, Chicago: 100 Jahre allegemeine Städtebau-Ausstellung in Berlin*, Berlin: DOM, 2010, p.112.

43) JAUSSELY (Léon), *Plan d'aménagement de la ville de Berlin et de ses environs, 1909*, Planches des chemins de fer, plan no.4, 312AA25.

44) JAUSSELY (Léon), *Plan d'aménagement de la ville de Berlin et de ses environs, 1909*, Planches de légendes du projet plan “Urbs” d'ensemble en allemand, 312AA25.

45) Loi du 14 mars 1919 concernant les plans d'extension et d'aménagement des villes. Loi du 19 Juillet 1924 modifiant et complétant la loi du 14 Mars 1919 sur les plans d'aménagement, d'embellissement et d'extension des villes.

46) Anonyme, “Concours du plan d'extension de Paris”, *L'Architecture*, Paris, 1^{er} avril 1920, p.82.

47) VIVIANE (Claude), *Les Projets d'aménagement, d'extension et d'embellissement des villes (1919-1940), Sources et questions*, Paris: Ministère de l'Équipement, du Logement, des Transports et de la Mer, 1990.

48) HÉNARD (Eugène), “Schematischer Entwurf zur Erweiterung von Paris mit den Vorhandenen und neu zu schaffenden Parkanlagen”, *Der Städtebau*, vol. 7, no 2, 1910, p.19.

49) Section d'hygiène urbain et rurale du Musée social, “Plan des nouveaux parcs et terrains de jeu”, 1909.

50) Commission d'extension de Paris, BONNIER (Louis), POËTE (Marcel), “Avant-projet d'un plan d'extension de Paris”, [s.l.,] 1913.

51) 三田村哲哉「ミュゼ・ソシアルとユルバニスム」『日本建築学会大会学術講演梗概集 DVD 建築歴史・意匠』日本建築学会、2016年、515-516頁。

52) Anonyme, “L'Extension de Paris”, *La Construction moderne*, Paris, 30 mai 1920, p.276.

53) COHEN (Jean-Louis), LORTIE (André), *Des Fortifs au perif*, Paris: Picard, 1992, p.120.

54) Collectif, Işın (EKRAM) édit., *Ankara, City of the Black Calpac, 1923-1938*, İstanbul: İstanbul araştırmaları enstitüsü, 2009, pp.34-40.

55) PÉROUSE (Jean-François), “La Concurrence entre experts urbanistes français et allemands en Turquie dans l'entre-deux-guerres: l'exemple de la planification d'Ankara”, *Orient-Institute Istanbul*, “Istanbul Texte

und Studien” 12, 2008, p.117-134.

56) JAUSSELY (Léon), *Place de la République et édifices publics de cette place, 1927*, Planche extraite du rapport sur le projet, 312AA32/1.

57) JAUSSELY (Léon), *Diagramme du plan général, Projet du concours pour l'aménagement de la ville d'Angora, 1927*, 312AA10/13.

58) JAUSSELY (Léon), *Projet du concours pour l'aménagement de la ville d'Angora, 1927*, îlots, zone mixte, 312AA32/1.

59) JAUSSELY (Léon), *Projet du concours pour l'aménagement de la ville d'Angora, 1927*, 312AA32/1.

60) モン＝ドール市が出資者になり、計画案が策定された。設計開始年は1919年、発表年は1925年。

61) Ville du Mont-Dore, *Plan d'aménagement d'embellissement et d'extension, 1926*, 343AA201/4.

62) ジョスリーはピエール・ギデッティ (Pierre GUIDETTI: 1878-1927)、技師ルイ・ギデッティ: Louis GUIDETTI: 1881-1954) と水力発電宮及び主要展示館を手がけた。同館は1920年パリ農業・競馬博覧会農業宮設計競技2等案を継承したものであった。オーギュスト・ペレ (Auguste PERRET: 1874-1954) による展望塔やロジェ＝アンリ・エキスペール (Roger-Henri EXPERT: 1882-1955) による観光館やフランス鉄道網館が建設された。

63) ROSENTHAL (Léon), “L'Architecture à l'Exposition de Grenoble”, *L'Architecture*, Paris, 25 septembre 1925, pp.309-316.

64) 出資者はグルノーブル市で、設計開始年は1921年9月、公開年は1928年8月3日、PAEEは実施された。

65) JAUSSELY (Léon), “Règlement de construction”, *Ville de Grenoble, Plan d'aménagement, et d'extension de Grenoble (Isère)*, [s.l.], 1925, pp.29-32.

66) PARENT (Jean-François), op.cit., 13), pp.91-93.

67) BLANCHARD (Raoul), *Rapport général, Exposition internationale de la houille blanche et du tourisme, Grenoble, mai-octobre 1925*, Grenoble: Imprimerie générale, 1925.

68) 依頼者はタルブ市で、設計開始年は1923年、同市による承認が1926年1月、公開年が1927年。

69) Ville de Tarbes, *Plan d'aménagement d'embellissement et d'extension, Solution proposée par la Ville de Tarbes*, mai 1924, CAMT/1997/025/213.

70) Ville de Tarbes, *Profils transversaux des voies, Plan d'aménagement d'embellissement et d'extension*,

mai 1925. CAMT/1997/025/270.

71) 依頼者はヴィッテル市で、設計開始年が1923年頃、市議会の承認が1925年12月、公開年が1928年、PAEEは実施された。

72) Ville de Vittel, *Plan d'aménagement d'embellissement et d'extension, 10 décembre 1925*.

73) 出資者はトゥルーズ市、設計開始年は1920年、市議会が1926年7月21日に依頼、完成が遅延し、1928年10月25日に委員会で発表、委員会は1930年4月2日に公表、公開年は1932年だが、計画案は1934年にオート＝ガロンヌ県に送付され、変更の依頼が続いた。

74) 航空写真はパリ航空による。縮尺は20,000分の1。312AA31.

75) Conseil d'architecture, d'urbanisme et de l'environnement de la Haute-Garonne, École d'architecture de Toulouse, op.cit., 12), pp.83-85.

76) PAPILLAULT (Rémi), *1515-2015, Atlas de Toulouse ou La ville comme œuvre*, Toulouse: Presses universitaires du Midi, 2015, p.162.

77) 依頼者はポー市、設計開始年が1925年、発表年が1928年、市の変更依頼は特別委員会の報告者プロストが破棄、公開年は1933年。

78) 商業の課題はジャック・リュイリエール (Jacques RUIILLIER: 1901-1986) の大型商業施設「パレ・ド・ピレネー」(1930)で対応した。

79) 商業宮殿、美術館、図書館が既存の街区内に建設された。

80) Association pour l'étude de l'urbanisme et de l'architecture, *Bordeaux et L'Aquitaine 1920-1940, Urbanisme et architecture*, Paris: Regirex-France, 1988, pp.69-74.

81) 依頼者はカルカソンヌ市、設計開始年は1924年頃、遅延、公開年は1934年。

82) JAUSSELY (Léon), *Plan d'aménagement, d'embellissement et extension, Carcassonne*, [s.l.] [s.d.], CAMT/1997/025/295.

83) アガシュもパリ国立美術学校でヴィクトール・ラルー (Victor LALOUX: 1850-1937) に建築を学んだが、西欧、北欧、東欧からギリシャエジプトに旅行する中でパトリック・ゲデス (Patrick GUEDES: 1854-1932) やヨーゼフ・スチューベン (Josef STÜBBEN: 1845-1936) の影響を受けて社会科学に傾倒し、ユルバニスムは応用社会学あるいは科学であると捉えている。

84) 教育機関にはボニエとアンリ・セリエ (Henri SELLIER: 1885-1957) による1919年の都市高等研

研究所 (École des hautes études urbaines)、研究機関にはポエトによる 1916 年の都市歴史・地理・経済研究所 (Institut d'histoire, de géographie et d'économie urbaines) がある。

85) 当時都市計画に関する雑誌の創刊は相次いだ。その中には、たとえばボニエとポエトによる 1919 年の「都市生活 La Vie Urbaine」や、プロストの下で都市計画家ジャン・ロイエ (Jean ROYER: 1903-81) が 1932 年に刊行した「ユルバニスム Urbanisme」がある。

86) アガシュが貢献し、国内で都市計画に関する会議が開催されたほか、国外でも相次ぎ、建築家たちが参画した。その中でも 1923 年にストラスブールでフランス都市計画家協会によって開催された「市町村の都市計画と衛生に関する国際会議 Congrès international d'Urbanisme et d'Hygiène Municipale」と 1931 年パリ植民地国際博覧会の開催期間中に開かれた「国際植民地・熱帯諸国都市計画会議 Le Congrès international

de l'urbanisme aux colonies et dans les pays de latitude intertropicale」は大きな影響を与えた。Société française des urbanistes édit., *Où en est l'urbanisme en France et à l'étranger*, [Congrès international d'urbanisme et d'hygiène municipale, Strasbourg, 1923], Paris: L. Eyrolles, 1923. ROYER (Jean) édit., DU VIVIER DE STREEL (Edmond) préf., Congrès international de l'urbanisme aux colonies et dans les pays de latitude intertropicale (Paris; 1931), *L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux communications & rapports du Congrès international de l'urbanisme aux colonies et dans les pays de latitude intertropicale*, 2 vols., La Charité-sur-Loire: Delayance, 1932, 1935.

謝辞

本稿は科研費 20K04907 と 19H05038 に基づく研究成果の一部である。

(令和 3 年 11 月 25 日 受付)